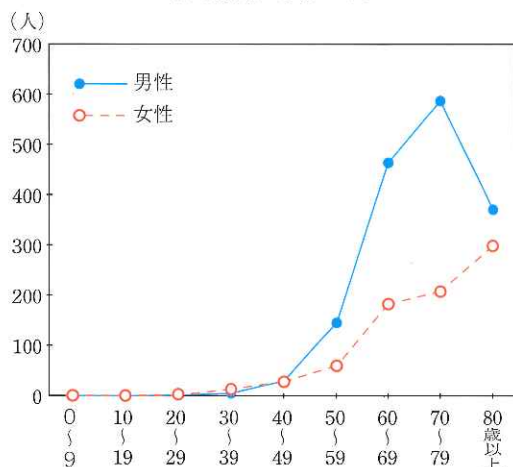


V 主要部位別集計

1. 胃

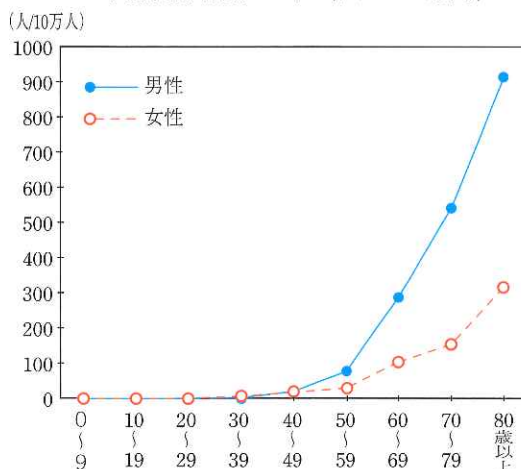
初発・確診のみの登録数：2401 初発・確診のみ・除 DCO の登録数：1942

年齢階級別罹患数



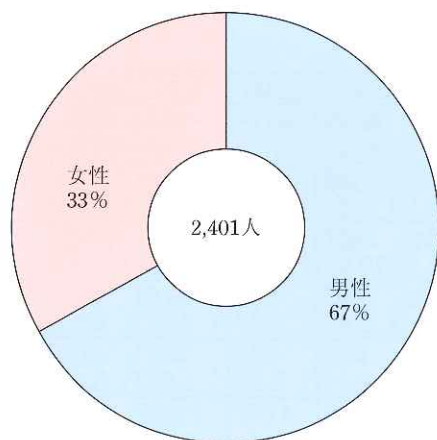
罹患数は、70歳代までは男女ともに年齢とともに増加し、女性では80歳以上も増加するのに対して、男性では減少する。平均寿命の性差が関与していると考えられる。

年齢階級別罹患率（人口10万対）



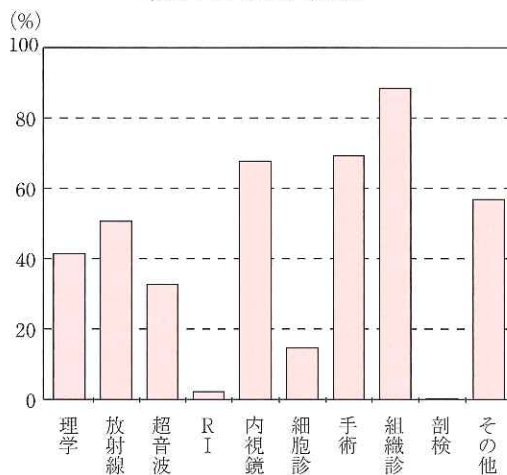
罹患率は男女とも年齢とともに上昇し、その性差は50歳代以上で拡大していく。この傾向は経年的に一定である。

がん罹患の男女比



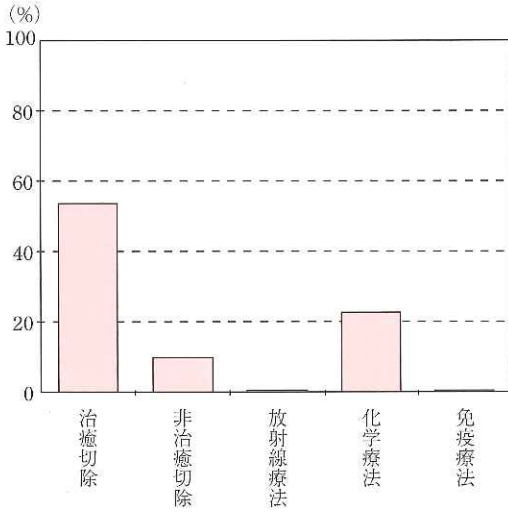
男女比は例年通り約2：1である。

検査実施の状況



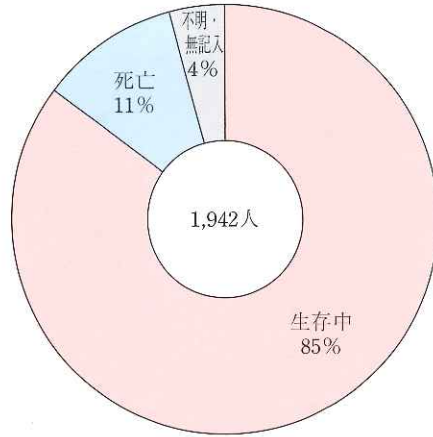
内視鏡（67.7%）および放射線（50.6%）が診断法の中心となっており、組織診（88.4%）や手術（69.2%）により確定診断が得られている。

治療の状況



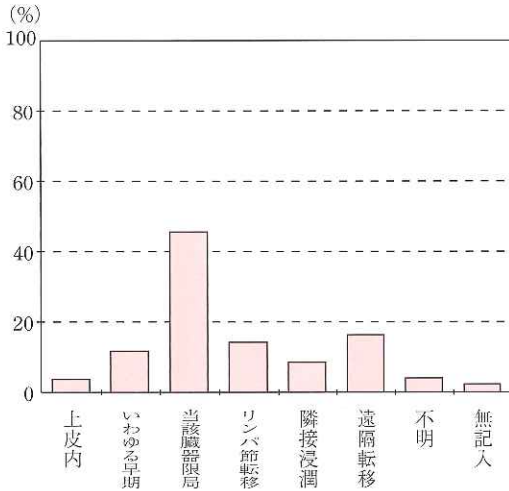
経年的な変化はほとんど見られないが、非治癒切除が6.4%から9.8%に増加した。

登録時（年内転帰）の状況



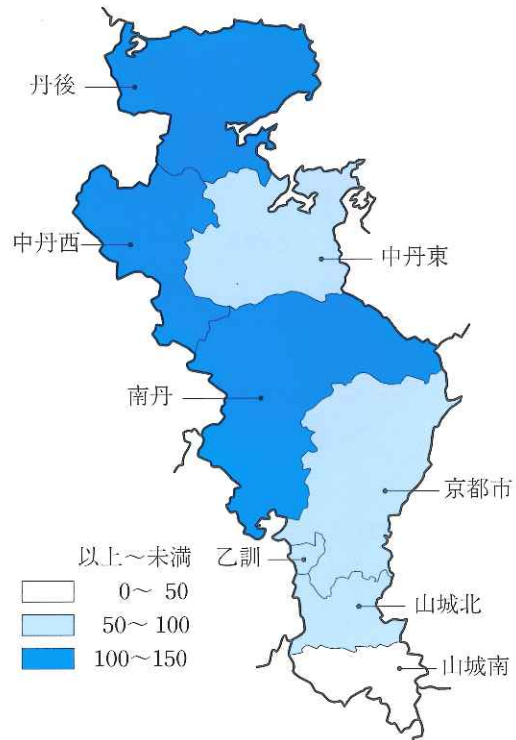
生存中の比率が前年81%から85%に上昇した。

ひろがりの状況



リンパ節、遠隔臓器、隣接臓器へのひろがりを合計した進行期症例の比率は39%で前年(40%)と比べて横ばいであったが、いわゆる早期がんが前年の24.6%から11.7%へと著しく減少した。

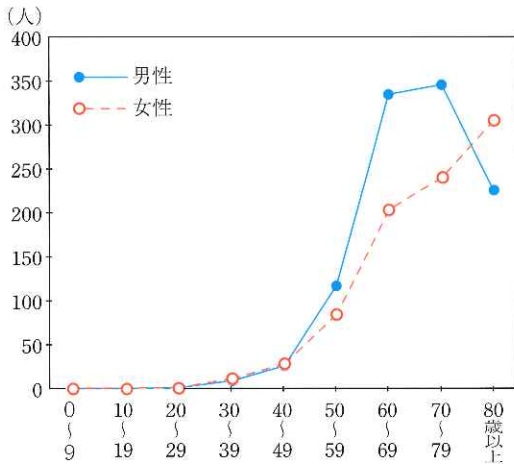
粗罹患率・保健所別マップ



2. 結腸

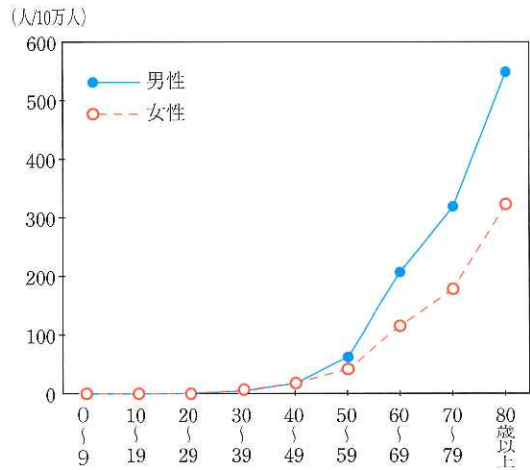
初発・確診のみの登録数：1931 初発・確診のみ・除DCOの登録数：1648

年齢階級別罹患数



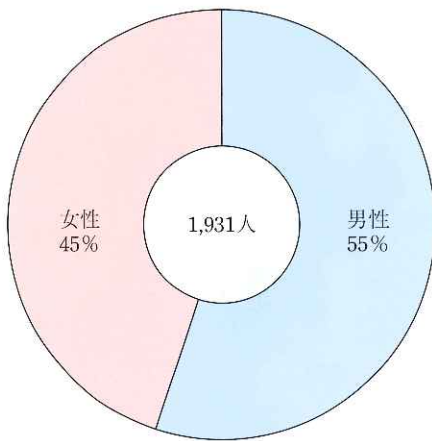
男性は70歳代に、女性は80歳代に患者数のピークがある。男性は80歳代で減少している。

年齢階級別罹患率（人口10万対）



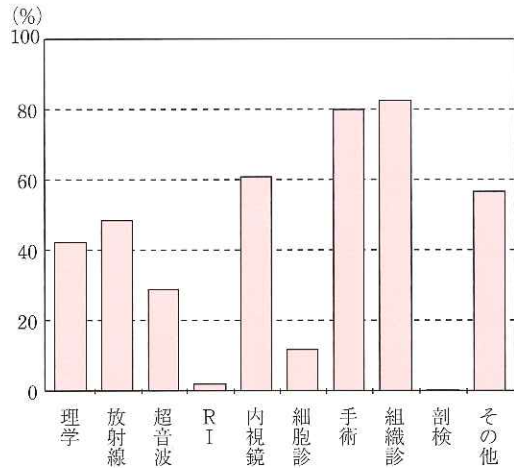
50歳代から男性の罹患率が女性を上回り、男女とも加齢とともに罹患率が上昇している。

がん罹患の男女比



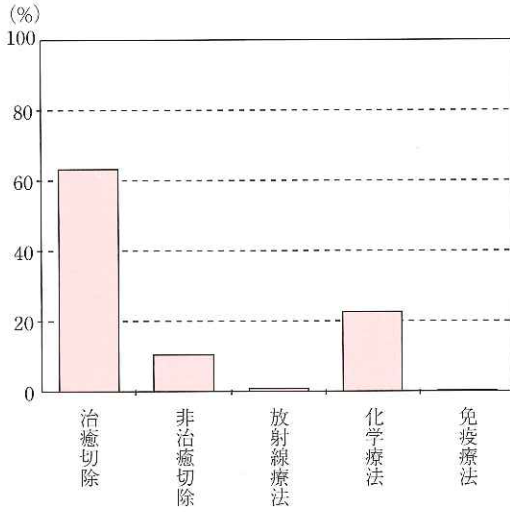
男女比は6：4から5：5の間で推移している。

検査実施の状況



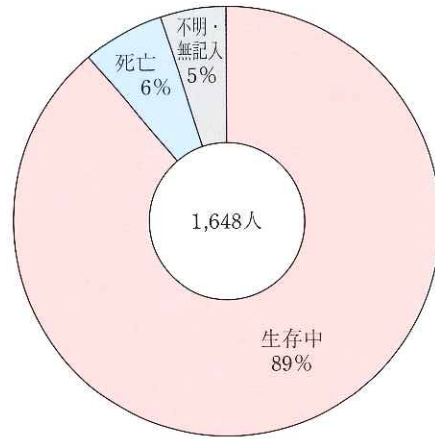
1997年より内視鏡検査（60.8%）が放射線検査（48.4%）を上回るようになり、大部分の症例で組織診（82.5%）による確定診断が行われている。

治療の状況



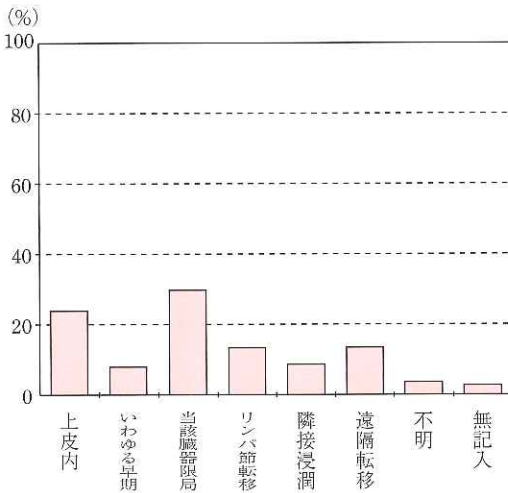
治癒切除率は昨年度より50%を上回るようになったが、本年度は63.2%で昨年度(58.8%)よりさらに増加した。

登録時(年内転帰)の状況



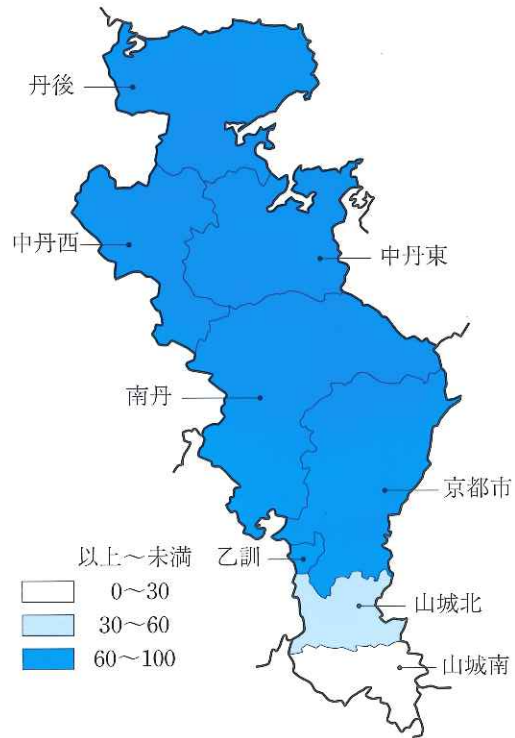
不明・無記入症例が昨年度から大きく減少しており、生存中が89%であった。

ひろがりの状況



早期癌(上皮内、いわゆる早期)の割合が31.7%と昨年度(36.2%)より若干減少し、当該臓器限局は29.7%で昨年度(24.4%)より増加している。

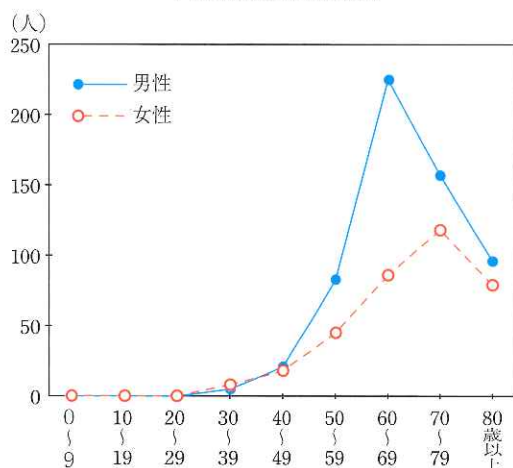
粗罹患率・保健所別マップ



3. 直腸

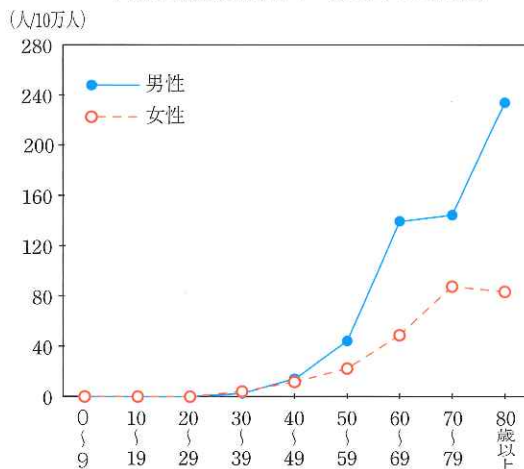
初発・確診のみの登録数：941 初発・確診のみ・除DCOの登録数：819

年齢階級別罹患数



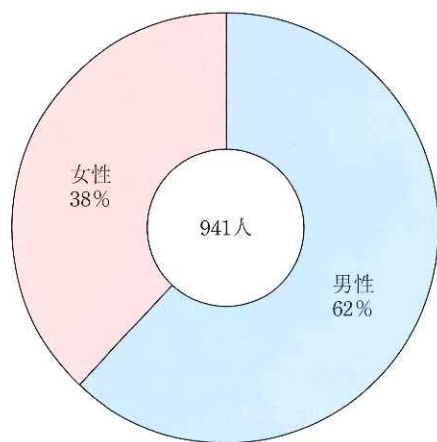
加齢とともに患者数の増加がみられ、男性では60歳代、女性では70歳代に患者数のピークがある。

年齢階級別罹患率（人口10万対）



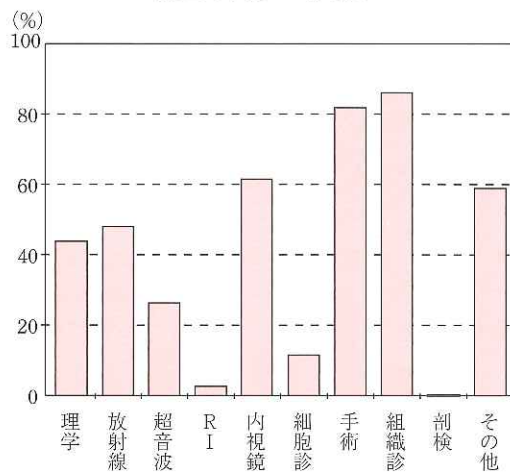
2004年度からは男女とも加齢とともに罹患率が上昇している。

がん罹患の男女比



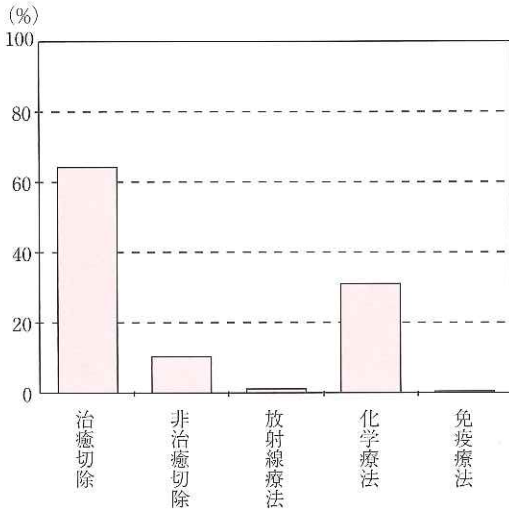
男女比は、6：4で昨年とはほぼ同様である。

検査実施の状況



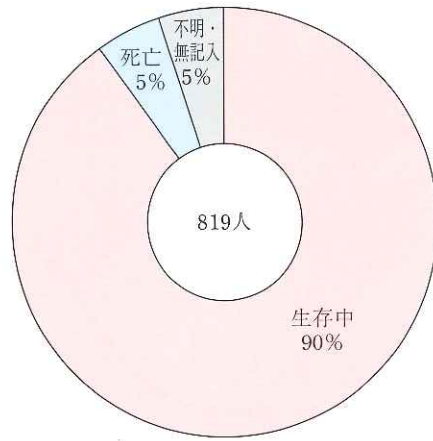
内視鏡検査（66.6→61.5%）、放射線検査（53.4→48.0%）と昨年度よりやや減少した。組織診は大部分の症例（86.1%）で行われている。

治療の状況



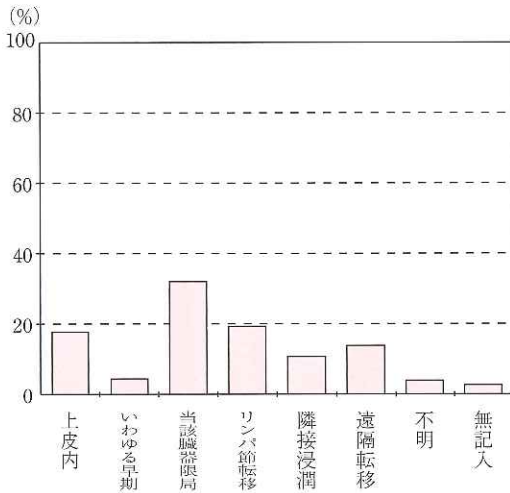
治癒切除率は昨年度よりも上昇している (58.2→64.2%)。

登録時（年内転帰）の状況



登録時生存率は90%で、昨年度（88%）とほぼ同等であった。

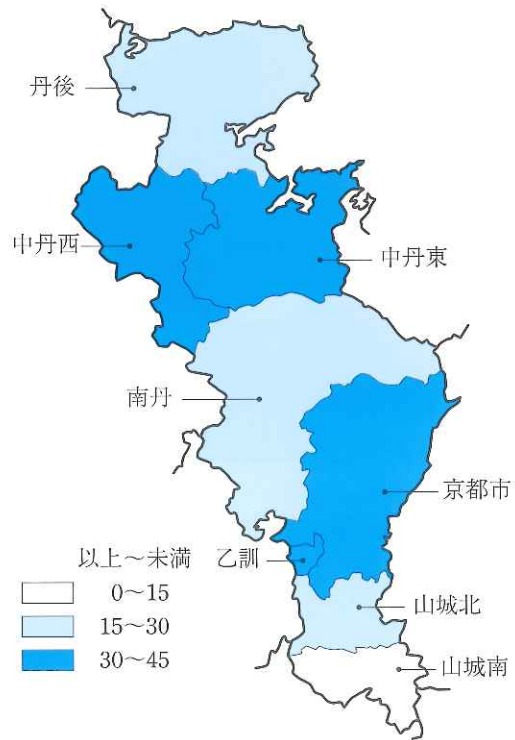
ひろがりの状況



早期がん（上皮内がん、いわゆる早期がん）の割合は昨年度より若干減少した (24.2→22.1%)。

隣接浸潤の割合は10.7%と昨年度（8.8%）より若干増加した。

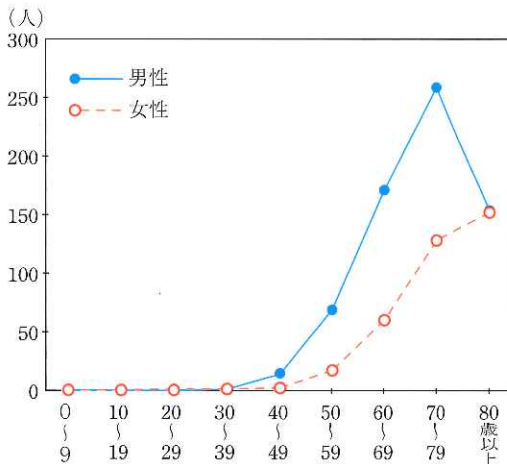
粗罹患率・保健所別マップ



4. 肝 臓

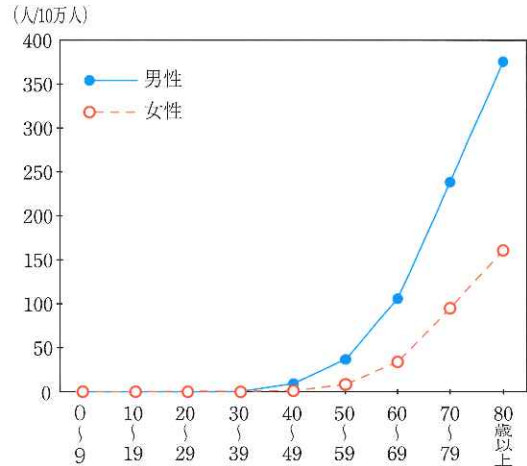
初発・確診のみの登録数：1029 初発・確診のみ・除DCOの登録数：627

年齢階級別罹患数



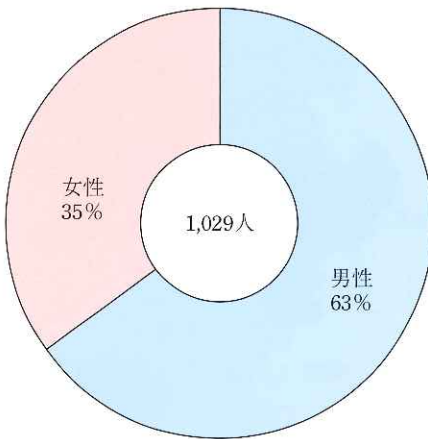
総登録数は年々増加し1,029例(前年比9%増)で、初めて1,000例を超えた。男性は70歳代、女性は80歳代にピークがあり、すべての年齢階級で男性の罹患数が女性をうまわっている。

年齢階級別罹患率 (人口10万対)



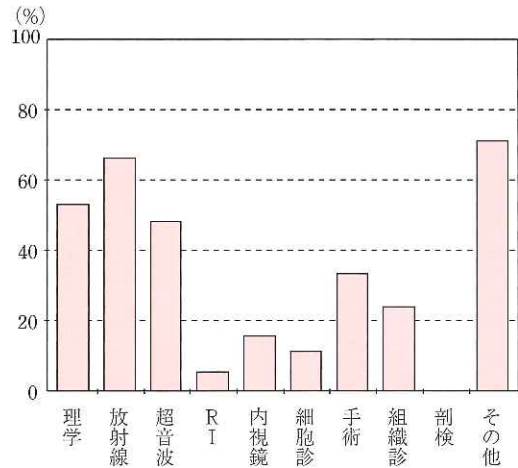
罹患率が男女とも年齢とともに上昇する傾向は前年同様であるが、男性の80歳以上では10万人に376.2人で前年の276.0人を大きくうまわった。

がん罹患の男女比



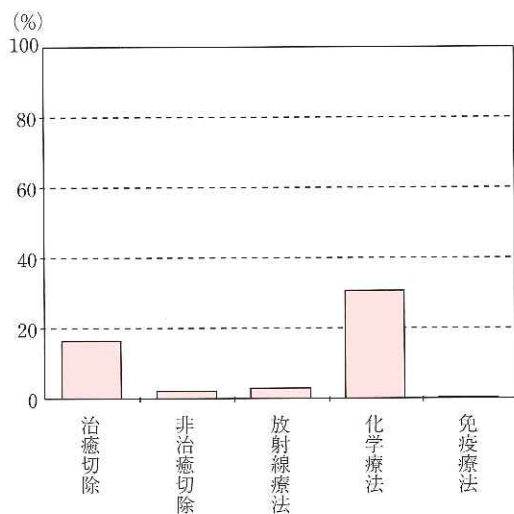
男女比はおおよそ2:1であり、この割合は経年的に一定である。

検査実施の状況



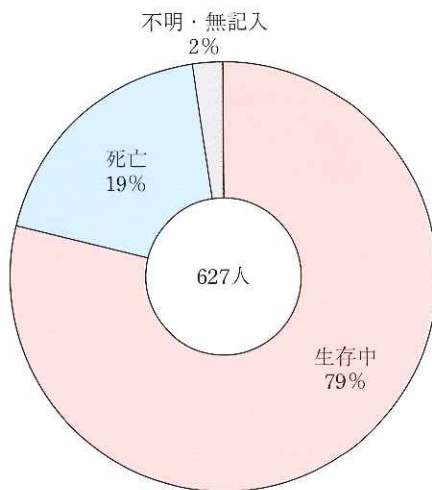
前年同様画像検査および腫瘍マーカー(その他に含まれる)による診断が主であるが、本年の特徴として、理学検査が50%を超えてきたのに対して、超音波検査の比率が50%を割り込んだ。

治療の状況



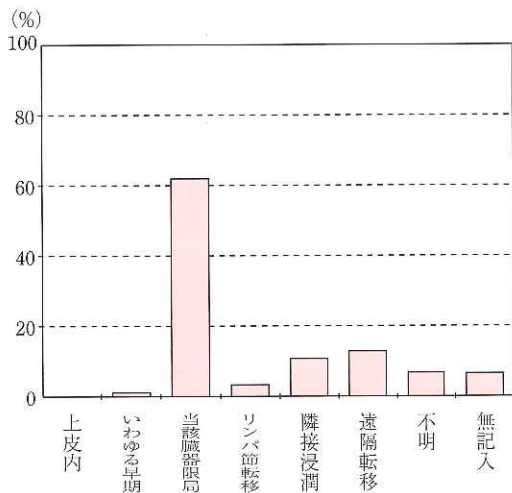
切除率が前年の11.7%から18.5%へと上昇している。さらに本年は化学療法が著明に増加した(21.8%→30.6%)。2009年5月にソラフェニブが使用可能となったことが関与していると考えられる。

登録時(年内転帰)の状況



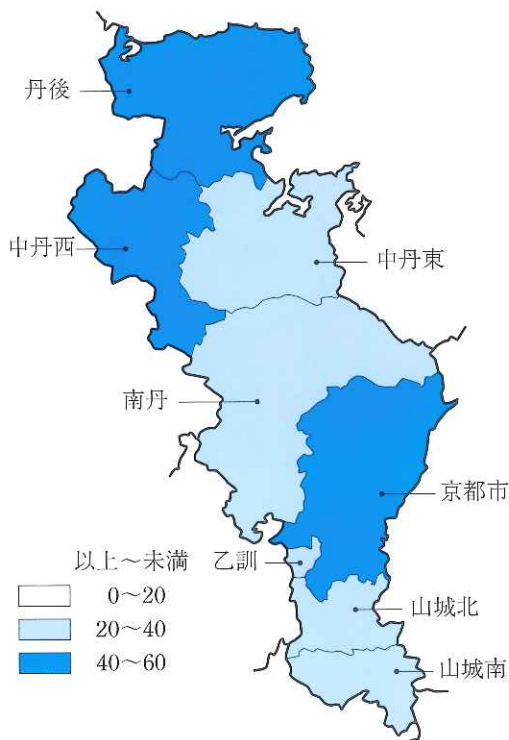
予後把握の精度の向上が進み、不明・無記入が前年9%から6.5%へと減少した。その分は生存中に上乗せされた形となっている。

ひろがりの状況



約3分の2は肝内に限局しており、その割合は経年的にほぼ同じである。肝外へのひろがりとしては、遠隔転移が前年の10.1%から12.8%へとやや増加した。

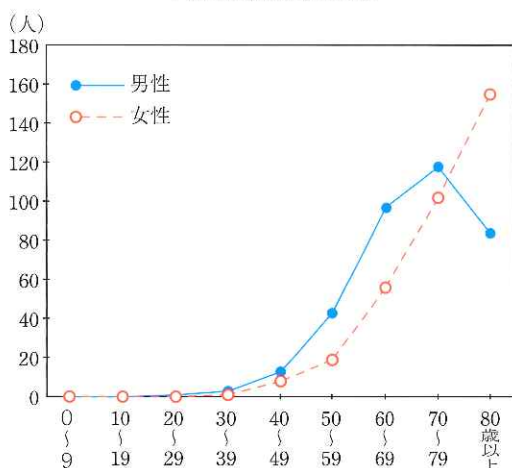
粗罹患率・保健所別マップ



5. 膵臓

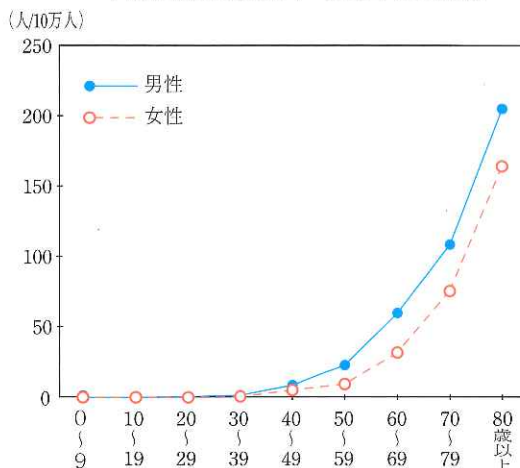
初発・確診のみの登録数：700 初発・確診のみ・除DCOの登録数：460

年齢階級別罹患数



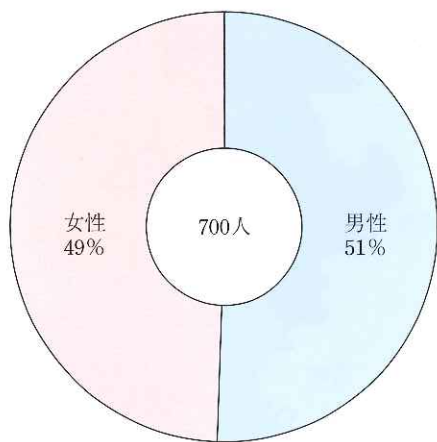
男性は70～79歳代の罹患数が毎年最多であり、80歳代で減少する。これは平均寿命の男女差の影響が考えられる。女性は80歳以上で罹患数が最多となる。

年齢階級別罹患率（人口10万対）



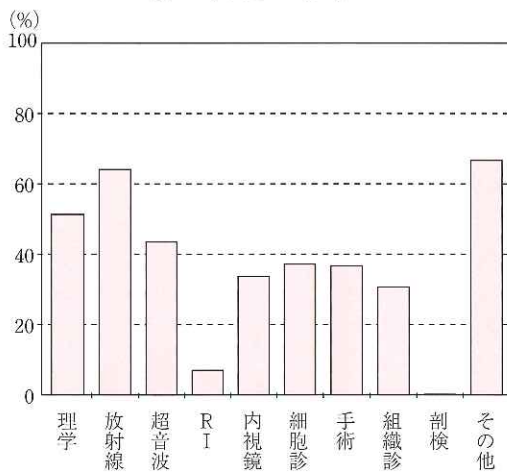
男女ともに50歳代より罹患率は増加する。罹患率は50歳代以上のすべての年齢層で男性が女性を上回っている。

がん罹患の男女比



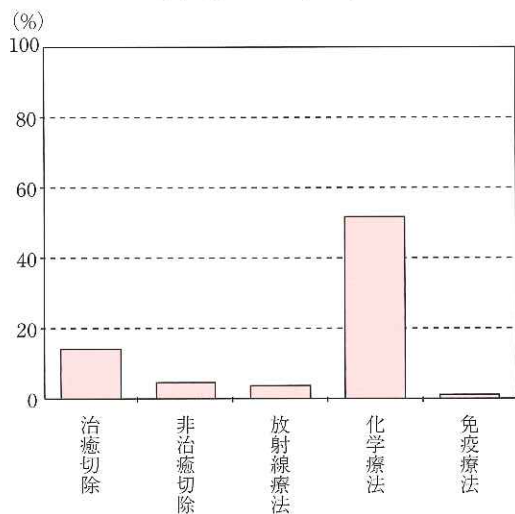
男女比は男性がやや多い状況が続いている。(罹患数：男性359、女性341)

検査実施の状況



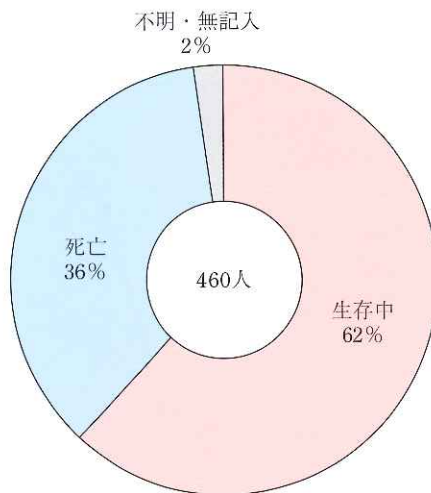
昨年と比して実施状況は、内視鏡で減少し細胞診で増加の傾向が若干認められるが、全体として大きな変化はない。

治療の状況



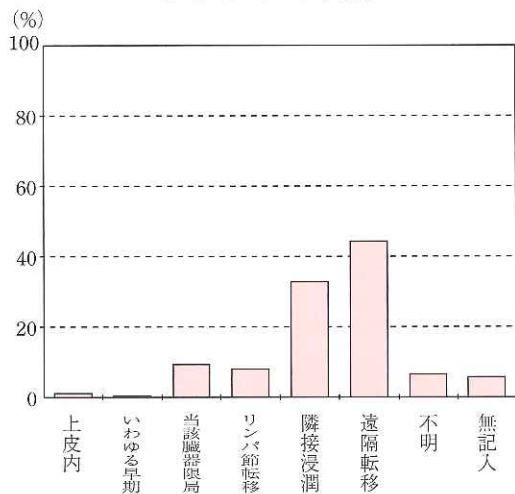
本年度は治癒切除に増加(7.5→14.1%)がみられるが、他の治療の状況に大きな変化はない。

登録時(年内転帰)の状況



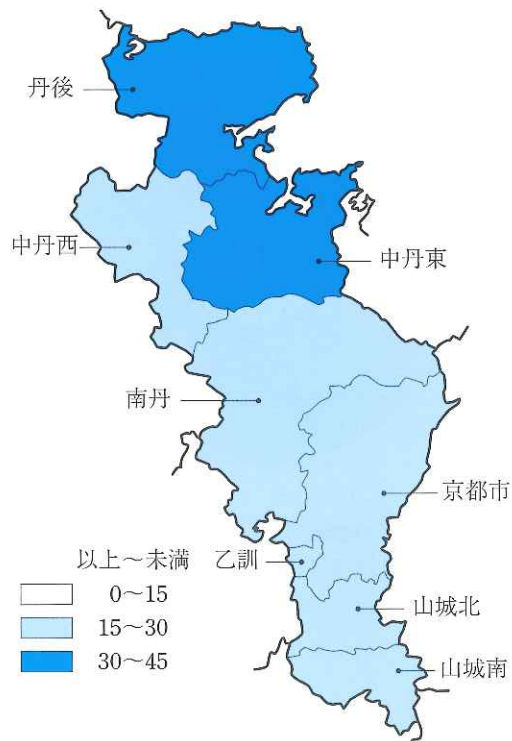
本年度の登録時生存率はやや増加(54→62%)している。年内転帰は不良である。

ひろがりの状況



早期癌と当該臓器限局は低率であり、隣接浸潤と遠隔転移が依然高率である。

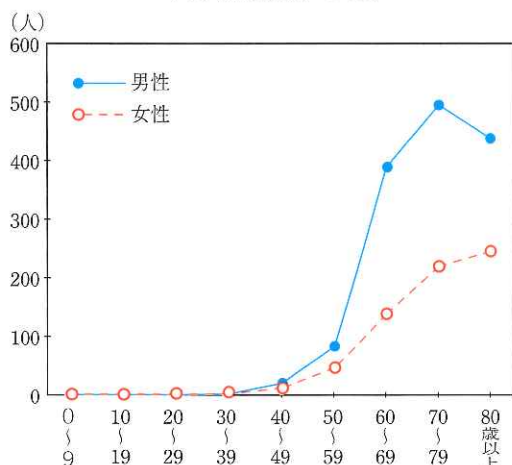
粗罹患率・保健所別マップ



6. 肺 臓

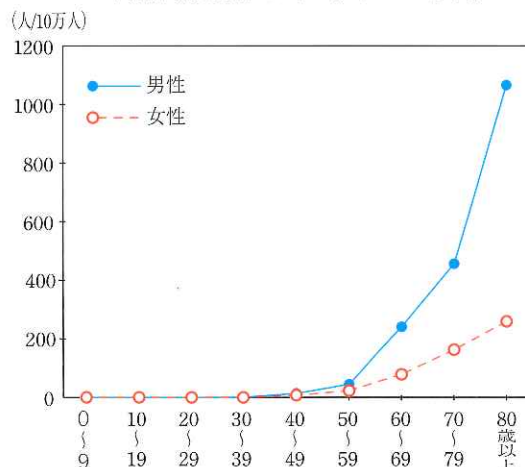
初発・確診のみの登録数：2085 初発・確診のみ・除DCOの登録数：1473

年齢階級別罹患数



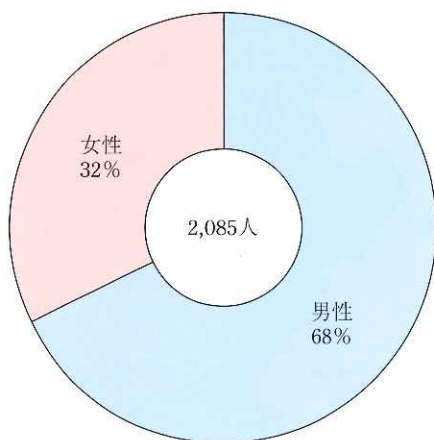
年齢別の罹患数は各年代とも男性が女性よりも多い。男女ともに50歳代から増加するが、男性は女性に比べて増加率が高い。例年に比し男性の60歳代、80歳代の罹患率が上昇した。最も多い年代は男性が70歳代で495名、女性は80歳代で245名であった。

年齢階級別罹患率（人口10万対）



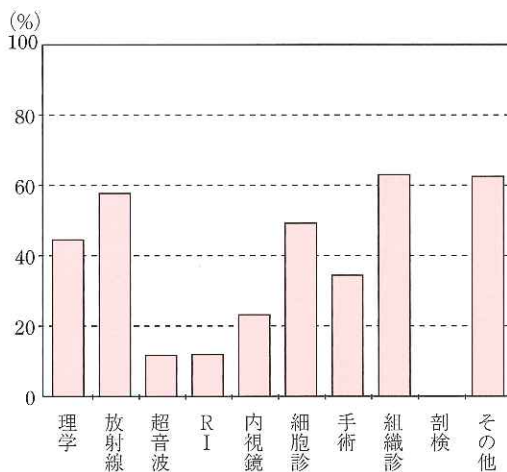
男女とも例年通り、加齢とともに罹患率が上昇し、男性は60歳代から急激な上昇に転ずる。それに比べて女性では緩やかな上昇を示す。前年度と比較すると男性は60歳代、80歳代、女性は70歳代、80歳代の罹患率がそれぞれ上昇した。

がん罹患の男女比



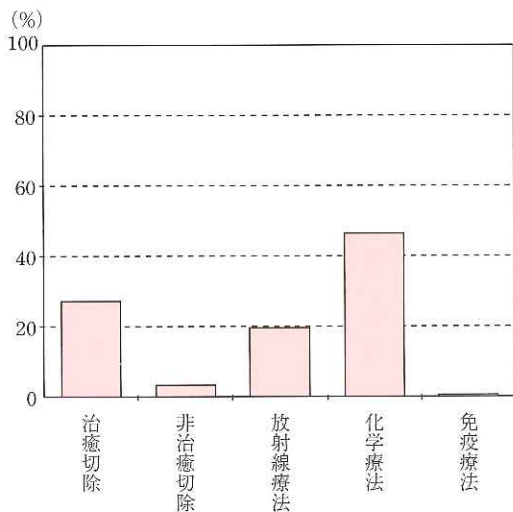
登録数は2085名で前年度より141名増加した。男女比は7：3で前年度と大きな変化はない。

検査実施の状況



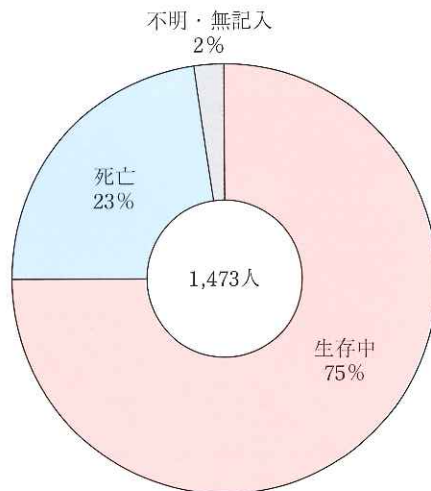
主要検査の実施率は組織診が63.0%と最も多く、細胞診は49.2%と前年度と大差はないものの、病理学的診断による確定診断が登録されている。今年度は理学検査が増加しているのが特徴である。その他の検査は例年と変化はみられない。

治療の状況



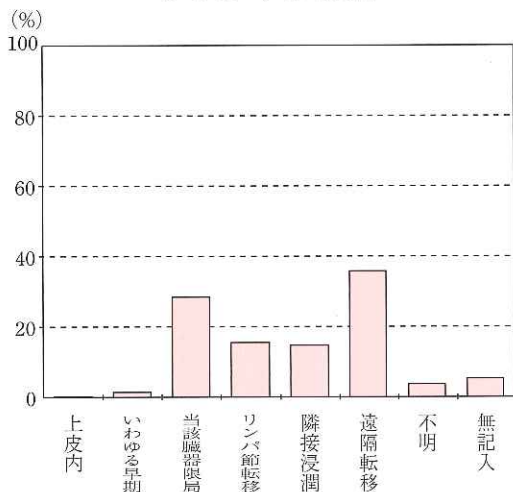
化学療法46.4%、放射線療法19.6%といずれも前年度と大差はなかったが、外科療法が30.5%(治癒切除27.2%、非治癒切除3.3%)と増加した。

登録時(年内転帰)の状況



登録数は1473名で前年度より257名増加した。年内死亡は23%で前年度と同様であり、肺がんの予後は不良である。今年度は不明・無記入が2%と大幅に減少し、生存者の数がより正確に把握されている。

ひろがりの状況



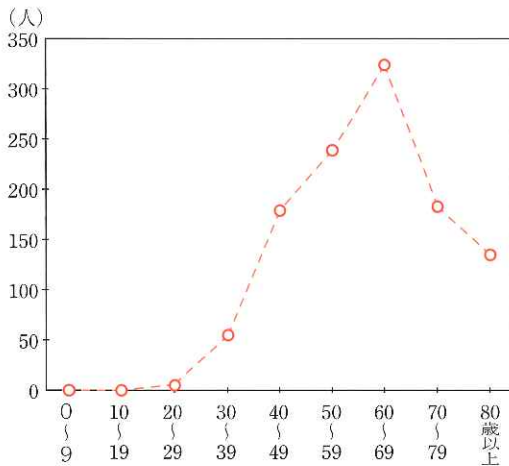
上皮内、早期、肺内限局を合わせて29.9%であるのに対し、リンパ節転移15.5%、隣接臓器浸潤14.7%、遠隔転移35.8%で、発見時にすでに進行がんであるものが66.0%を占めている。

粗罹患率・保健所別マップ

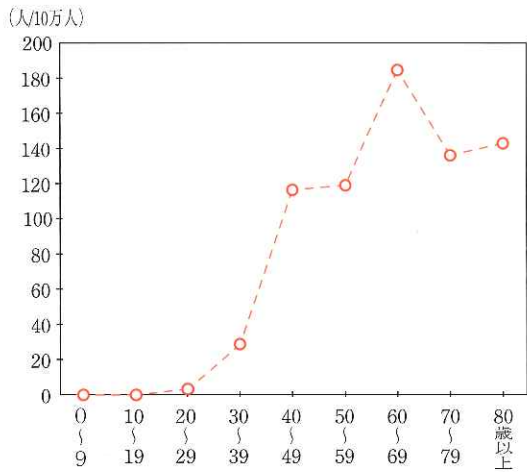


7. 乳房(女性) 初発・確診のみの登録数：1121 初発・確診のみ・除DCOの登録数：1029

年齢階級別罹患数

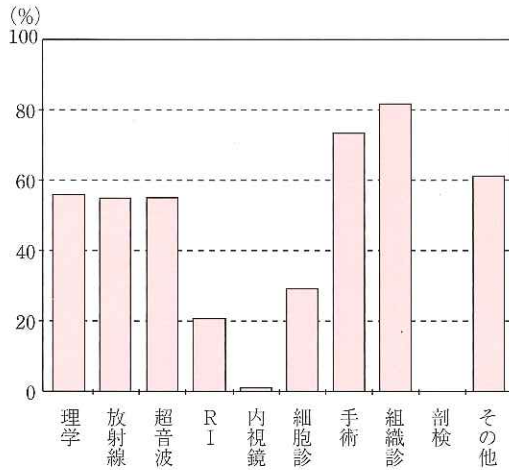


年齢階級別罹患率(人口10万対)

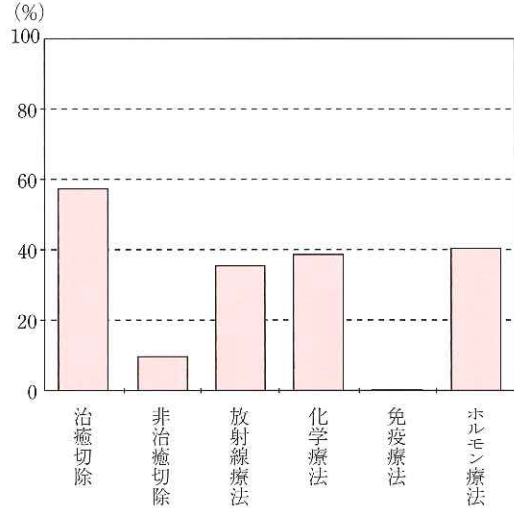


2009年の調査では、2008年の結果と同様の結果で、ピークが60代にあり、50～60代で全体の過半数を占めている。京都における乳癌の罹患は50代から60代に多い傾向が見られる。

検査実施の状況



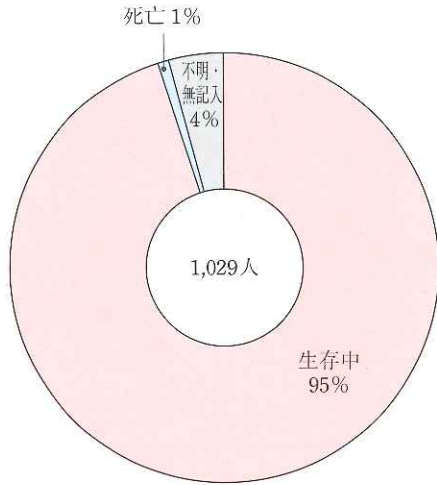
治療の状況



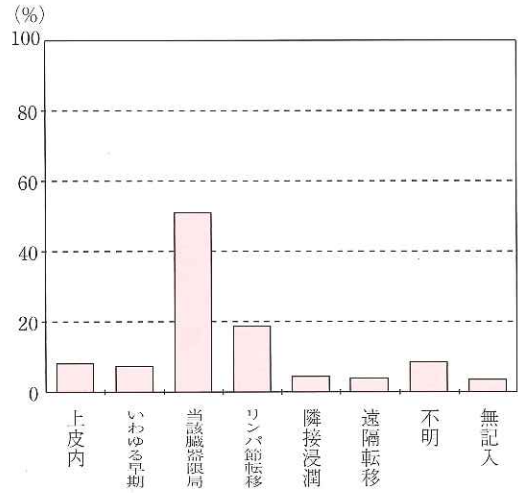
検査に関しては、理学検査、放射線検査、超音波検査、RIなどが行われている。2008年と比べて理学検査件数が10%以上増えている。原因は確定できないが、特定の病院においてデータ入力ルールを変えた形跡があることや、登録票の様式変更による影響が原因ではないかと推測される。病理検査では2008年と比べても細胞診が減少し、組織診が増加する傾向が続いている。

67%に手術が行われている。治癒切除は57.3%に行われているが、2008年の64.5%くらべると低くなっている。非治癒切除が増えた事が原因と考えられる。4割から5割の症例にホルモン療法、化学療法。放射線療法が行われていることには大きな変化は見られない。

登録時（年内転帰）の状況



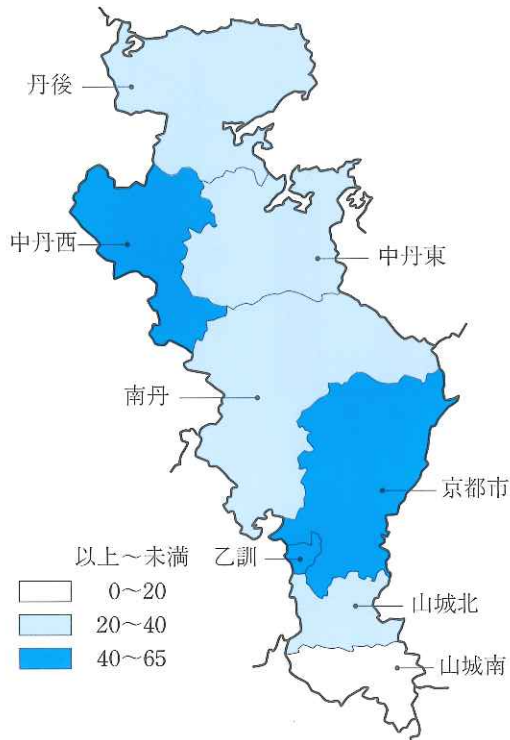
ひろがりの状況



1029人中15人(1.45%)が死亡。2008年は1005人中16人(1.6%)であり、大きな変化は見られない。生存中の人々が2008年の84%から95%に上がっているが、これは2008年の不明、無記入の14%が4%に減少した結果だと考えられる。転帰には変化は見られていない。

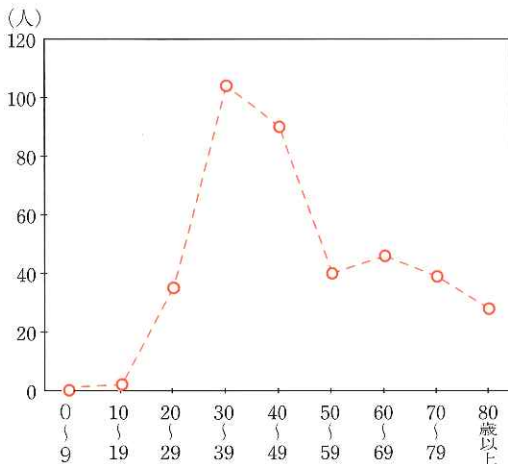
非浸潤癌や早期癌、当該臓器に限局した乳癌を合わせると66.4%である。全国平均に照らし合わせるとやや少ない傾向にあり、リンパ節をはじめとして進行している乳癌が多い傾向にある。2008年との比較では大きな変化は見られない全国に比して、生存率、早期癌の率が若干低い傾向にあり、検診の普及が望まれる。

粗罹患率・保健所別マップ

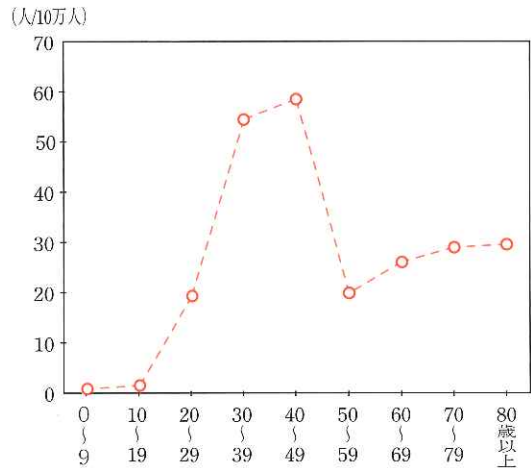


8. 子宮頸部 初発・確診のみの登録数：385 初発・確診のみ・除DCOの登録数：371

年齢階級別罹患数



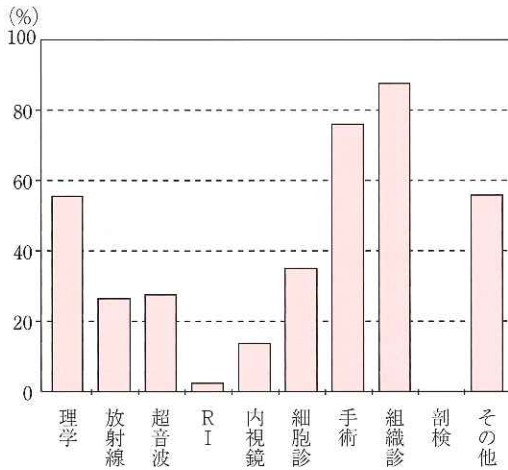
年齢階級別罹患率 (人口10万対)



総登録数は385例で、10歳未満に1例、10歳代に2例の発症が認められる。罹患数で最も多いのは前年度同様30歳代で、その後は減少している。

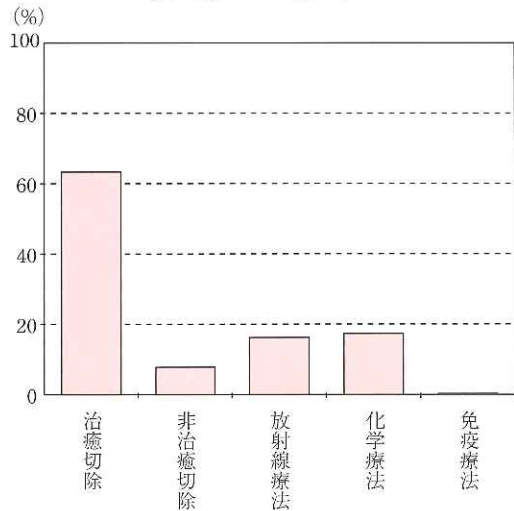
年齢階級別にみた子宮頸がん罹患率は若年層で増加傾向がみられ、20歳代から増加し40歳代にピークを迎え、その後減少して60歳代以降は増加傾向となる。

検査実施の状況



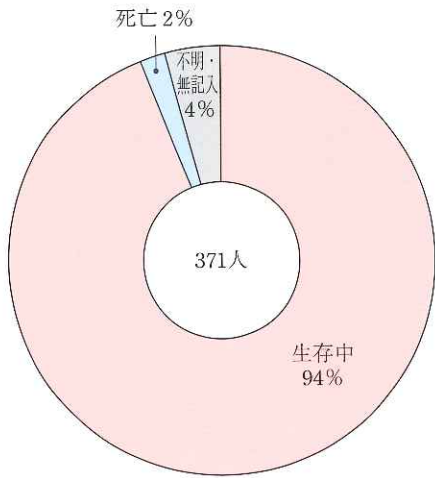
この数年大きな変化は見られていないが、病理学的診断では組織診が87.6%と最も高い。細胞診の比率が前年度の58.4%から35%に減少している。

治療の状況

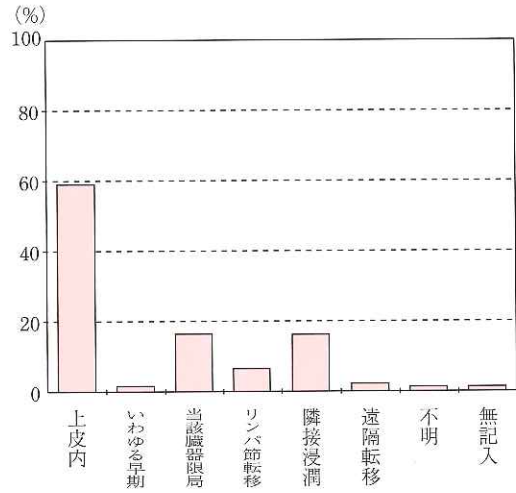


本年度の治癒切除率は前年度の69.3%より若干低下して63.3%である。化学療法及び放射線療法はそれぞれ17.3%、16.2%で前年度に比べて大きな変化は見られない。

登録時（年内転帰）の状況



ひろがりの状況



子宮頸がんは早期がんの占める割合が多く予後が良い。本年度の生存中は94%で年内転帰の状況は良好である。

上皮内癌の割合が最も多く、前年度の56.8%から59%と増加傾向にある。

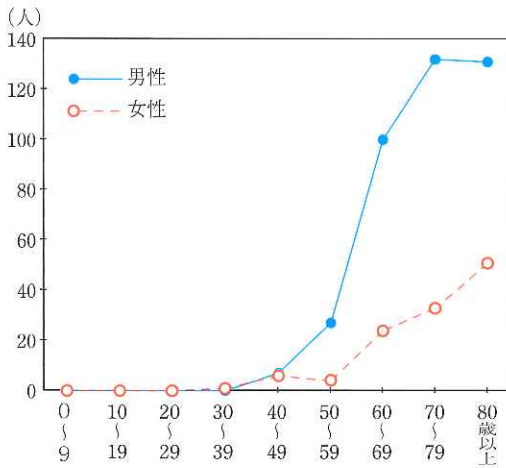
粗罹患率・保健所別マップ



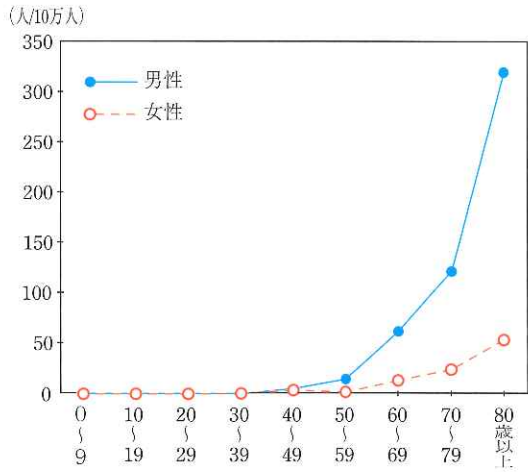
9. 膀胱

初発・確診のみの登録数：516 初発・確診のみ・除DCOの登録数：456

年齢階級別罹患数

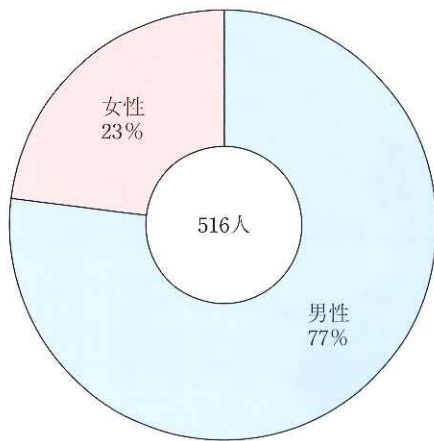


年齢階級別罹患率（人口10万対）



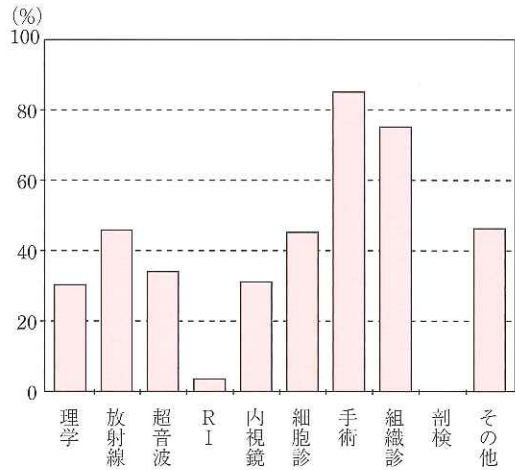
男性が女性に比べて明らかに多く、年齢の上昇とともに増加傾向となる。傾向は例年通りである。

がん罹患の男女比



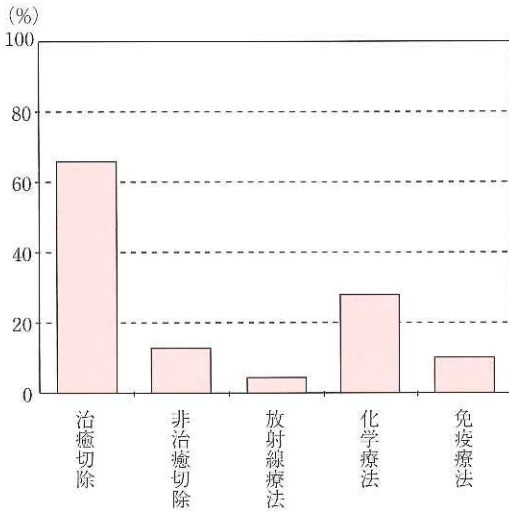
男女比は4:1で例年と同レベルである

検査実施の状況



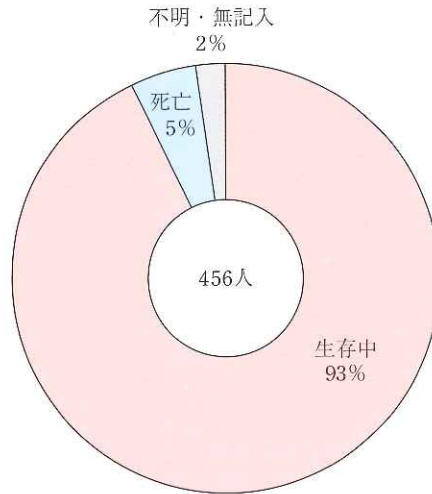
85%に手術が、75%に組織診が行われている。経尿道的手術・生検により組織診を行うことが診断の基本であり、その原則が反映した結果と考えられる。

治療の状況



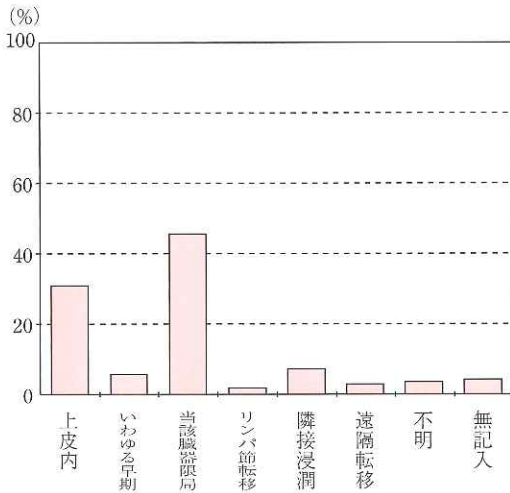
治癒切除率は66%であり、例年の水準（50-60%）より高くなっている。化学療法が行われている症例が28%ある。免疫療法（10%）の内容は、上皮内癌に対するBCG療法と考えられる。

登録時（年内転帰）の状況



不明・無記入が2%と例年に比べ少なかった。生存率が93%であり、年内転帰の状況は良好である。

ひろがりの状況



当該臓器限局までの合計が80%を超えており、昨年と同レベルである。

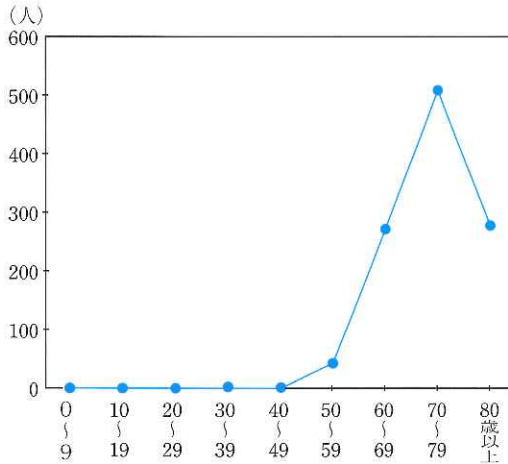
粗罹患率・保健所別マップ



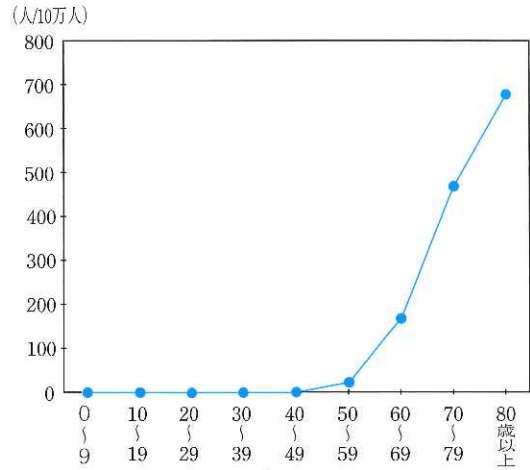
10. 前立腺

初発・確診のみの登録数：1102 初発・確診のみ・除DCOの登録数：979

年齢階級別罹患数

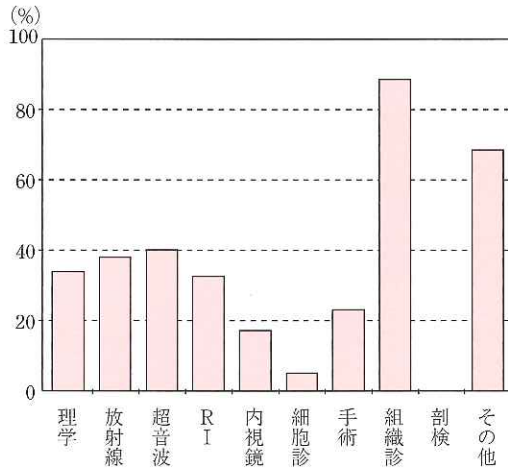


年齢階級別罹患率（人口10万対）



罹患数・罹患率ともに昨年より増加がみられる。特に70歳代の増加が著名である。罹患のほとんどは60歳以上であり、罹患率は年齢とともに増加している。高齢者のがんといえる。

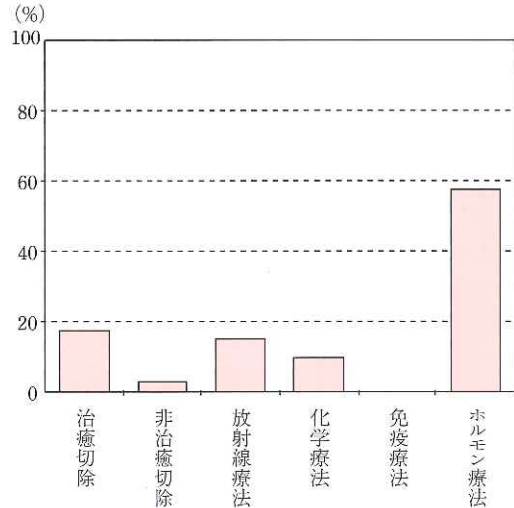
検査実施の状況



約90%（88.6%）の症例で組織診が行われている。

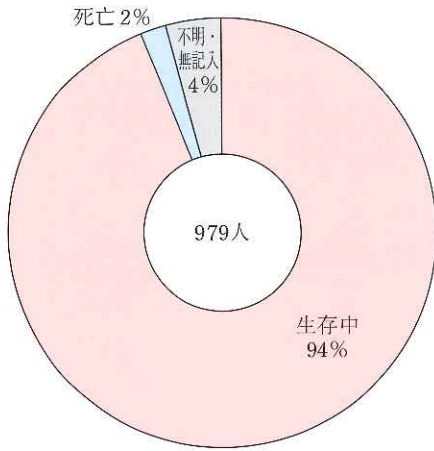
『その他』とされる68.5%の大半にPSA検査が含まれていると推察される。

治療の状況

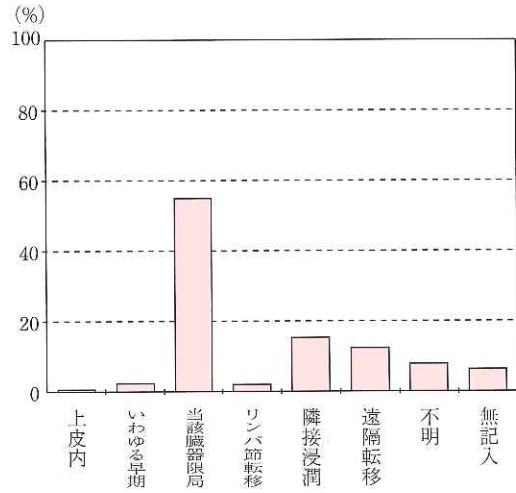


根治を目的とした治療である手術（治療切除・非治療切除）と放射線療法を併せると約45%である。

登録時（年内転帰）の状況



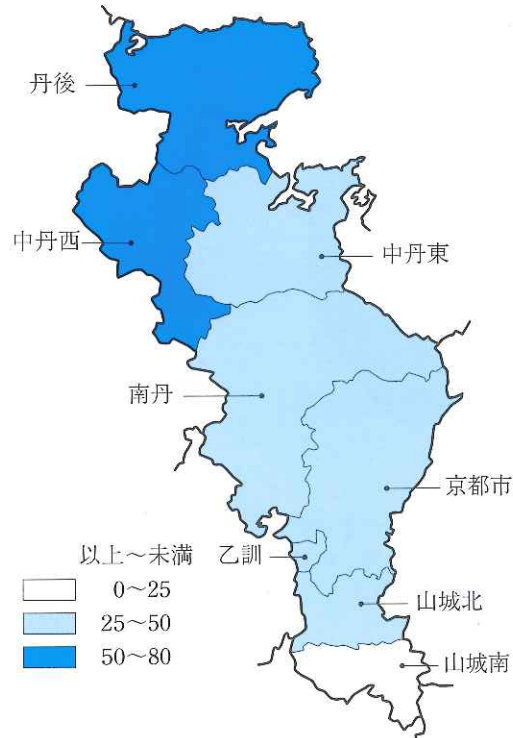
ひろがりの状況



2%の死亡があるが、94%は生存中であり、年内転帰の状況は良好であると言える。

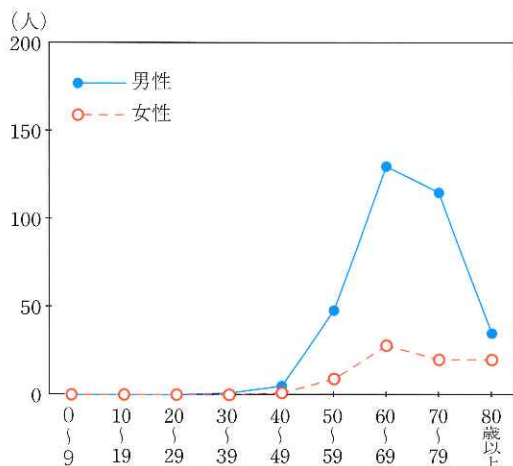
前立腺に限局するがんが約58%で昨年よりやや低い。遠隔転移が見られたのは約12%で昨年よりやや低い。

粗罹患率・保健所別マップ

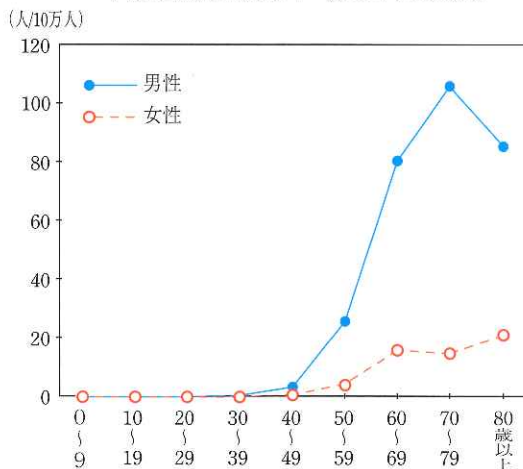


11. 食道 初発・確診のみの登録数：412 初発・確診のみ・除DCOの登録数：333

年齢階級別罹患数

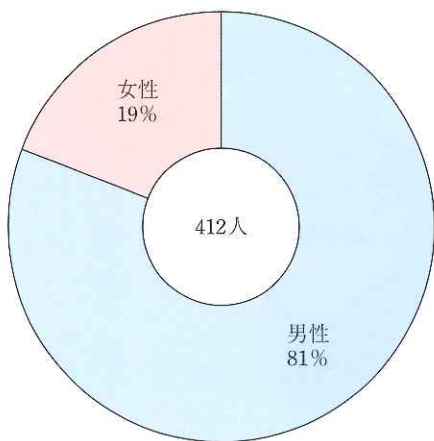


年齢階級別罹患率（人口10万対）



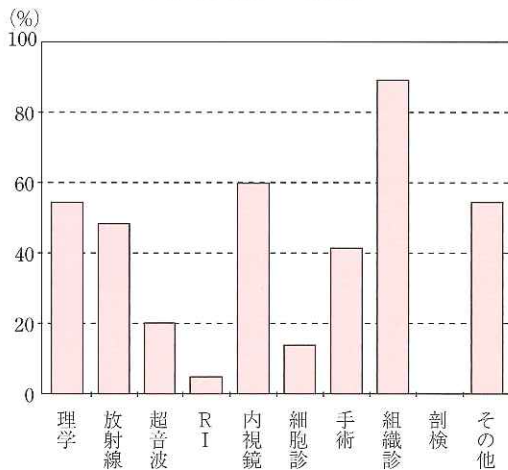
全年齢階級において男性の罹患数、罹患率が高く、男女ともに年齢と共に罹患率が增大する。

がん罹患の男女比



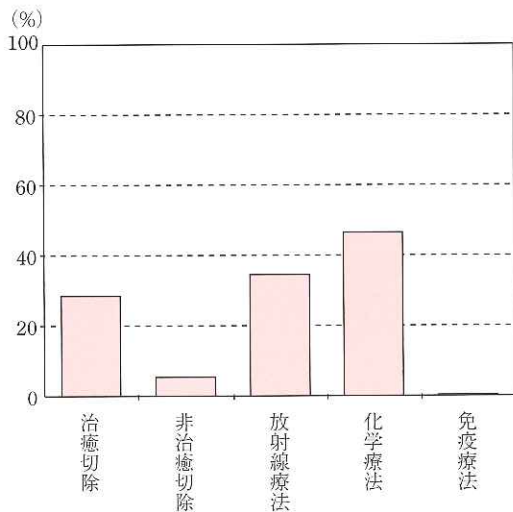
男女比はおよそ4：1であり、これまで同様に男性に多い。危険因子である飲酒・喫煙歴の男女差が影響していると考えられる。

検査実施の状況



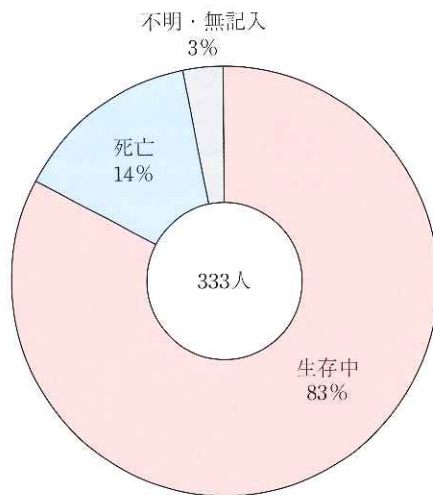
全体として前回までと変化がない。初期診断として内視鏡検査および組織診が同時に行われ、さらに病期診断のためX線CTを中心としてFDG-PETや超音波、MRIが用いられている。

治療の状況



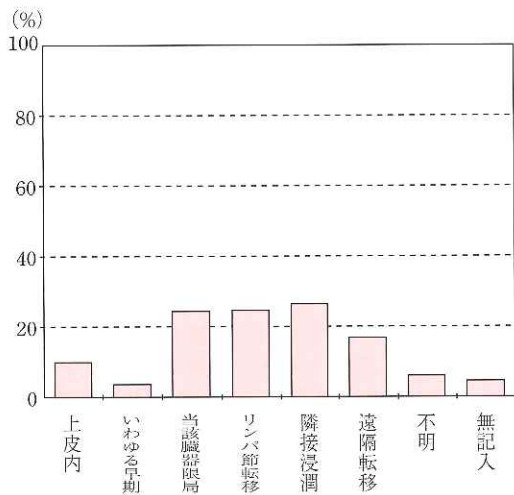
治癒切除、および放射線治療、化学療法あるいはその組み合わせを受けている患者が多いことが示されており、前年と同傾向である。

登録時（年内転帰）の状況



前年よりさらに不明、無記入が減少している。生存中が83%であり、短期の成績として良好である。

ひろがりの状況



上皮内癌およびいわゆる早期がんの割合は13.5%、また根治手術不能の進行癌（隣接浸潤および遠隔転移）の割合も43.2%と前年同様であり、早期の発見は増えていない。

粗罹患率・保健所別マップ

